

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：34303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01007

研究課題名(和文) 鎌倉真言派の展開と鎌倉幕府・朝廷の宗教政策

研究課題名(英文) The development of the Kamakura Shingon School and the religious policies of the Kamakura Shogunate and the Imperial Court

研究代表者

平 雅行 (TAIRA, Masayuki)

京都先端科学大学・人文学部・特任教授

研究者番号：10171399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)： 鎌倉真言派の展開を検討し、以下の事実を明らかにした。(1) 鎌倉で初めての密教僧である定豪は、勝長寿院や鶴岡八幡宮の別当となり、この一門が鎌倉真言派の主流となった。ただし定豪が奥州の平泉惣別当に就任した事実はない。

(2) 定豪の弟子のうち定親は、將軍権力と北条得宗との権力闘争に巻き込まれて1248年に追放された。その後、鎌倉真言派は低迷の時代に入るが、定清と定憲がきびしい時期を支えた。

(3) 鎌倉随心院流の敵愾は將軍宗尊の護持僧となったが、1266年に宗尊とともに失脚した。鎌倉三宝院流の守海は、執権北条経時の子である頼助を育てた。やがて頼助を中心に鎌倉真言派は爆発的に発展し、京都にも進出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

鎌倉真言派の検討によって、以下の事実を明らかにした。(1) 鎌倉幕府と禅宗とのつながりが過剰に強調されてきたが、それは北条時頼段階の一時的現象であり、幕府が保護した中心は顕密仏教である。

(2) 『吾妻鏡』の記事が1266年で終わっていることが、鎌倉幕府の宗教政策研究の制約となっていた。本研究は鎌倉で活躍した僧正の数を指標とすることで、幕府の政策に2度の転換(寛元・宝治の政変とモンゴル襲来)があったことを解明した。鎌倉真言派の展開も、幕府の政策転換から大きな影響を受けている。(3) 幕府と主従関係を結んだのは僧侶や貴族にも及んでおり、本研究によって鎌倉幕府を多面的に捉えることが可能となった。

研究成果の概要(英文)： I have studied the development of the Kamakura Shingon School and have uncovered the following facts. (1) Jogou was the first esoteric Buddhist monk to work in Kamakura. He was appointed as Bettou of Tsurugaoka Hachiman Shrine, and his sect became the mainstream of the Kamakura Shingon School. However, the fact that Jogou was appointed as Hiraizumi Soubettou does not exist.

(2) Joshin, among Jogou's disciples, became embroiled in a power struggle between the power of the Kamakura shoguns and the power of Hojo Tokusou. He was then banished from Kamakura in 1248. Thereafter, the Kamakura Shingon School entered a period of stagnation, but Josei and Joken supported the school through this difficult period.

(3) Sukai, a member of the Kamakura Sanboin school, educated Raijo. Raijo was the son of Hojo Tsunetoki, who became regent of the Kamakura shogunate. Eventually, the Kamakura Shingon School exploded under Raijo's leadership and expanded to include Toji and Daigoji temples in Kyoto.

研究分野：日本中世仏教史

キーワード：鎌倉幕府 鶴岡八幡宮 北条時頼 九条頼経 定豪 定親 定清 頼助

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

黒田俊雄は権門体制論をベースにして、1975年に顕密体制論を提起した。そして中世は民衆仏教の時代ではなく国家仏教の時代であるとし、中世仏教の中核を顕密仏教と位置づけた。その衝撃は大きく、古代中世仏教史はシェーマの見直しが相次いで疾風怒濤の時代に入った。

それに対し佐々木馨は、顕密体制は西国の宗教秩序であって、東国では幕府を中心に別の宗教秩序が構築された、と主張した。そして、東西の宗教秩序の相違点として、東国における山門派(延暦寺出身僧)の排除をあげている。この見解は実証的根拠に不十分なところがあるが、顕密体制論の弱点を剔抉したことは率直に評価すべきだろう。顕密体制論は基本的に畿内近国の宗教秩序をもとに構想されており、東国仏教を十分に視野に収めていなかったからだ。また、佐々木の東国仏教自立論は、佐藤進一らの東国国家論と通じるところがあり、本研究は鎌倉時代の国家構造をどのように捉えるか、という問題とも密接につながっている。こうして、東国仏教を顕密体制論の立場から検討することが重要な課題として浮上してきた。

2. 研究の目的

(1) 鎌倉幕府は、自由昇進を禁じて御家人が朝廷と主従関係を結ぶことを禁じたが、同様の措置は鎌倉の顕密僧にも講じられている。つまり鎌倉幕府は御家人だけではなく、膨大な数の僧侶をその内部に編成していた。そこで幕府と主従関係を結んだ僧侶を「幕府僧」と概念化し、その実態解明を進めることにした。本研究は、これまでの鎌倉山門派、鎌倉寺門派の研究を踏まえ、鎌倉真言派の個別研究を行って、鎌倉幕府による真言僧徒の編成の実態を解明しようとするものである。

(2) 幕府僧は東国だけで活動していたのではなく、幕府の了解のもとで、東寺・東大寺・醍醐寺・延暦寺・園城寺に進出して、その長官に就任している。これは京都と鎌倉の仏教界が密接につながり、朝廷と幕府の宗教政策が複雑に入り組んでいたことを物語っている。本研究によって、その具体的実態を解明しようとした。

(3) 鎌倉幕府と朝廷との関係は時期によって変化している。とすれば、同様のことは宗教政策についても言えるだろう。そこで鎌倉幕府の宗教政策の時期的変化を明らかにして、鎌倉真言派の展開に与えた影響を考察するとともに、朝廷―幕府関係の歴史の変遷を検討する一助としたい。

3. 研究の方法

本研究の独創的なところは、鎌倉で活動した僧侶の事蹟を手がかりにして、鎌倉幕府の宗教政策の歴史の変遷を解明しようとする点にある。幕府の宗教政策を解明するには『吾妻鏡』が根本史料となるが、その記事は1266年で終わっており、4割以上の時期が空白である。鎌倉時代全体をカバーできる指標を設定できなければ、政策の変化を測定することが不可能である。そこで本研究は、鎌倉で活動した僧正を網羅的に検出し、僧正の数の時期的変化をもとに政策転換を浮き彫りにしようと考えた。

そして鎌倉の真言僧の個人的事蹟を検討することで、鎌倉真言派の展開が、政策転換の時期的変遷と連動しているか否かを検証しようとした。

4. 研究成果

(1) 今の研究段階においては、実証的な個別研究を積み重ねてゆくことが何よりも大切である。そこで、まず個別研究を行い、それをもとに総合的考察に向かった。

(2) 論文「平泉惣別当に関する基礎的考察」では、以下のことを明らかにした。①幕府僧が平泉の寺社を「植民地的」に統治したのが平泉惣別当であるが、かつて遠藤巖氏は平泉惣別当の歴代を復元し、それが定説化している。しかしそのうち、定豪・定親が惣別当であったかについては検討の余地がある。二人は鎌倉真言派の中心人物であるだけに、彼らの在任の有無は、鎌倉真言派研究にとって極めて重要である。②諸史料の検討の結果、定豪・定親は平泉惣別当に就任しておらず、その時期は鎌倉山門派の良信・良禅が惣別当であったことを明らかにした。

③京都在住の未受戒の少年(良禅)が、平泉惣別当に任じられたのは異様な人事であるが、その背後に異例の事態があったことを解明した。將軍実朝の暗殺事件(1219年)である。鎌倉幕府は、皇族將軍を後鳥羽院に拒絶されたものの、慈円の尽力によって摂家將軍(九条頼経)の実現にこぎつけた。そこで、幕府は九条家の良禅を平泉惣別当に任じることで、慈円への謝

意を示した。その結果、平泉惣別当は良信・良禪の併任という異例の体制となった。④ 1246年、九条頼経が北条得宗との争いに敗れると、良禪は惣別当職を剥奪されて帰洛した。これにより、良信だけが平泉惣別当として残った。⑤ 1253年、良信は死の直前に、勝長寿院別当と平泉惣別当を弟子の最信に譲り、幕府によってその相続が認められた。⑥「弘長二年四月一日座主下知状」は、鎌倉時代の重要史料とされてきた。本史料を子細に検討した結果、その内容は中世仏教の在り方から甚だ乖離しており、江戸初期に作成された偽文書であることを明らかにした。

(3) 論文「定豪とその弟子」で、以下のことを明らかにした。①定豪は伝法灌頂の実績をもった初めての幕府僧である。源頼朝が密教を整備しようとしていることを知って鎌倉に赴き、わずか2年で定豪は幕府僧の宿老となった。②定雅は定豪の嫡弟として鶴岡八幡宮別当に補任されたが、悔返によって嫡弟と別当の2つの地位を失った。③名門出身の定親は、定雅に代わって定豪の嫡弟となり、鶴岡別当となったが、1234年までは京都を中心に活動していた。定親は1247年の宝治合戦で鎌倉を追放された後も、東寺長者と東大寺別当の地位を維持した。これはこの2つのポストが幕府の恩顧で入手したものではないことを物語っている。定親に関する『吾妻鏡』の記事に誤りが多いが、これは彼が鎌倉から追放されたことが関わっているだろう。④宝治合戦後に鎌倉真言派は冬の時代を迎えるが、大門寺別当定清は、得宗方であった醍醐寺実賢の嫡弟となっていたため、鎌倉真言派の中心として厳しい状況を乗り切った。鶴岡八幡宮供僧の定憲は、定豪の側近として京・鎌倉で活動していたが、定豪の没後は、勧修寺光宝の嫡弟として活動の舞台を鎌倉に固定した。そして定清は政治面を中心に、定憲は宗教活動面を中心に、定豪の活動を支えた。

(4) 論文「鎌倉真言派の展開」では、以下のことを明らかにした。①護持祈祷体制を補強したいとの將軍九条頼経の要請をうけて、父の九条道家は親嚴に嫡弟の嚴海を鎌倉に下向させるよう命じた。鎌倉に赴いた嚴海は明王院供僧・別当に補任され、頼嗣の御祈衆に任じられた。親嚴が亡くなると嚴海は随心院の門首となり京・鎌倉を往還して祈祷活動を続けた。②嚴恵は嚴海から相承した將軍頼嗣御祈衆の安堵を求めたが、その安堵は容易に出なかった。建長の政変(1352年)を機に、九条家一門が排除され將軍頼嗣も追放されたが、嚴恵は幕府から將軍宗尊の護持僧、明王院別当に任じられて幕府祈祷に従事した。嚴恵は鎌倉を離れることが叶わなかったため、親杲に随心院の留守を託して、静嚴への伝法灌頂を命じた。しかし將軍宗尊の失脚により、嚴恵は鎌倉を出奔して京都に逃れて遁世することになる。

③嚴海が將軍頼経の招聘で鎌倉に下向して以降、多くの随心院流僧徒が鎌倉に赴いて祈祷を行い、数多くの随流僧を育成した(嚴瑜・嚴雅・経嚴・尊嚴・賢長など)。嚴恵の失脚後、鎌倉随心院流の中心となったのが久遠寿量院別当能嚴である。そして能嚴は京都での公請実績がないまま、僧正に任じられ、嚴濟・嚴朗らの弟子を育成した。嚴恵が失脚すると、静嚴一嚴家一経嚴の随心院は門跡化をとげて京都での活動に専心し、傍流の僧侶が鎌倉で活動した。④以上の鎌倉随心院流の他に、鎌倉中期の重要な学僧である守海と宏教を取りあげた。まず守海は、京都での不遇から鎌倉に赴いた。やがて憲深から伝法灌頂をうけて、鎌倉三寶院流の中心となり、金剛王院流実賢一定清と対抗した。また、佐々目遺身院の別当に任じられて執権北条経時らの菩提を弔うとともに、幼い頼助(経時息)を育成しながら、知法の学僧として多くの人材を育てた。一方、宏教は西院流の学僧であり、能禪・能海など数多くの弟子を育成した。

(5) 論文「東国鎌倉の密教」では、鎌倉の密教の歴史展開について検討し、次のことを明らかにした。①源氏將軍の時代は、鶴岡八幡宮寺・勝長寿院・永福寺などの將軍御願寺が造立され、頭密寺院の整備が進んだ。しかし、幕府祈祷は公請(くじょう、国家的奉仕)と認定されなかったため、質の高い密教僧を揃えることができなかった。②九条頼経時代は將軍護持のため、九条家に仕える僧侶などが鎌倉に大量進出し、鎌倉の密教は隆盛期を迎えた。しかし將軍頼経との権力争いに北条時頼が勝利すると、時頼は仏教政策を劇的に転換した。③時頼は鎌倉の頭密仏教を縮小し、その運営を鶴岡八幡宮別当隆弁(寺門派)に委ねた。また、北条得宗の権力を象徴する仏法として禅をえらび、建長寺を創建して日宋交流を積極的に進めた。④モンゴル襲来を機に幕府の政策は再転換された。異国降伏祈祷のため、密教を改めて重視するようになり、鎌倉末期に鎌倉の頭密仏教は爆発的な発展をとげた。そして幕府僧は京都に逆流し、東寺・醍醐寺・東大寺・園城寺・延暦寺の長官に就任して、京都の頭密仏教界を席卷した。

(6) 論文「鎌倉時代の仏教革新について」で、次のことを明らかにした。①鎌倉時代に仏教革新運動が起きたのは、治承・寿永の内乱と承久の乱において、頭密仏教が鎮護国家の機能を果たせず、その無力さを露呈したことが原因である。②法然・親鸞は非権力の世界に仏教を再生させようとした。一方、承久の乱は道元と日蓮の思想形成に決定的な影響を与えており、二

人はともに新たな鎮護国家仏教を構築しようとした。

(7) 論文「中世延暦寺をどのように捉えるか」では、延暦寺が中世寺院に変容していった歴史的経緯を論じ、延暦寺出身の僧侶が鎌倉幕府に受け入れられた歴史的前提を明らかにした。

(8) 以上の個別研究を踏まえて、鎌倉真言派の展開の全般的考察を行った。鎌倉幕府の宗教政策は二度の転換があったが、鎌倉真言派の動向は、幕府の政策転換とほぼ連動していたことが確認できた。

(9) 総括的検討として、最後に中世の国家構造について考察した。顕密体制という国家と仏教との関係を研究するには、鎌倉時代の国家構造の検討が不可欠であるからだ。鎌倉幕府は一般に、東国政権・軍事権門の両側面で語られることが多いが、実際には、①唯一の軍事権門、②権門政治の最有力権門として、王朝国家の意思決定や政策運営に関与する側面、③脱権門体制的性格、④東国の実質的支配者、⑤王朝国家の東国における地方分枝、という5側面があった。特に幕府は王朝国家の治安維持を担っただけでなく、その財政を積極的に支えており、王朝国家と鎌倉幕府は有機的な結びつきを深めている。この点で黒田俊雄が提唱した権門政治の考えが今なお有効であることを確認した。以上から鎌倉時代においては、王朝国家という全国政権が存在したことを改めて確認し、その宗教的外皮たる顕密体制の存在を国家論から裏づけることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 平 雅行	4. 巻 47
2. 論文標題 鎌倉真言派の展開 随心院流を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都先端科学大学 人間文化研究	6. 最初と最後の頁 35～100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20558/00001410	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 平雅行	4. 巻 45
2. 論文標題 定豪とその弟子－鎌倉真言派の成立・展開－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都先端科学大学 人間文化研究	6. 最初と最後の頁 83-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20558/00001375	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 平雅行	4. 巻 32
2. 論文標題 鎌倉時代の仏教革新について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 興風	6. 最初と最後の頁 1-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 平雅行	4. 巻 69
2. 論文標題 東国鎌倉の密教	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 智山学報	6. 最初と最後の頁 347～376
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18963/chisangakuho.69.0_347	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平雅行	4. 巻 43
2. 論文標題 平泉惣別当に関する基礎的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都先端科学大学 人間文化研究	6. 最初と最後の頁 101-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20558/00001333	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平雅行	4. 巻 42
2. 論文標題 中世延暦寺をどのように捉えるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 叡山学院研究紀要	6. 最初と最後の頁 55-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 平雅行
2. 発表標題 東国鎌倉の密教
3. 学会等名 智山教学大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 平雅行	4. 発行年 2020年
2. 出版社 真宗大谷派金沢教区教化委員会	5. 総ページ数 205
3. 書名 まはさてあらんー親鸞 生涯のあゆみ	

1. 著者名 黒田 俊雄、平 雅行	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 322
3. 書名 王法と仏法	

1. 著者名 西山良平、笹川尚紀、吉川真司、今津勝紀、本郷真紹、告井幸男、勝山清次、美川圭、元木泰雄、熊谷隆之、平雅行、馬田綾子、早島大祐、仁木宏、山田雄司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 424
3. 書名 日本の歴史 古代・中世編	

1. 著者名 平 雅行	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 295
3. 書名 改訂 歴史のなかに見る親鸞	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------